

アンチ・アンチエイジングの思想 一役に立たなきゃ、生きてちゃいかんか？ 一

◎上野千鶴子

超高齢社会に突入して高齢者が人口の3割を超えた今日、「長生き地獄」や「年寄り」は集団自決を」などという高齢者の厄介者視、迷惑視が登場した。医学界では健康寿命の延伸や認知症予防の動きが盛んである。だが長寿化の傾向のなかでは、健康寿命の延伸はフレイル期間の延伸を伴うかもしれず、認知症もまた病気と言うより加齢に伴う自然な変化であるとも言える。かつて「寝たきり・垂れ流し・自力寝返り不能」という乳児であった存在から、同じように要介護5の終末期を迎えるのは避けることができない。ひとは依存的な存在として生まれ、依存的な存在として死んでいく。それなら「老い」に抗うアンチエイジングのムダな試みよりは、老いを受容するアンチ・アンチエイジングの思想が、今ほど必要とされている時代はないのではないだろうか。

セクシズム（性差別）に加えてエイジズム（年齢差別）という概念が登場したが、アンチエイジズムはふたつの方向をとる。ひとつは「まだまだ若い」「年寄り扱いするな」という高齢者のイメージをポジティブに更新するアンチ・エイジズムであり、後者は「老い衰えて弱くなった」「その何が悪いか」という弱さを受容するアンチ・エイジズムである。前者は若さと生産性の価値を疑わないことによって高齢者に自己否定感をもたらす。

高齢者が「年寄り」扱いされることに拒否感や抵抗感を持つのはそのためである。高齢者がフレイル期間を生きながらえることができるようになったのは、栄養水準、衛生水準、医療水準、介護水準の高まり、すなわち文明社会のたまものである。過去の人々が希求してやまなかったものを手に入れたことを、なぜわたしたちは寿ぐことができないのだろうか。わたしたちに必要なのは生かしてもらえる命を最後まで生き切る思想ではないだろうか。そのためには何が必要か、考えたい。